

助けられる人から助ける人へ
特集 地域の防災力

防災士

防災士は、平成7年の阪神・淡路大震災をきっかけにつくられた資格で、認定特定非営利活動法人日本防災士機構の認証を受けたかたのことです。地域のさまざまな場面で、減災や地域の防災力向上のために活動しています。

Interview

防災士
 えんどう みちよ
 遠藤美智代さん



子育てが落ち着いた頃に女性消防団に入り、地域のかたと関わるうちに『防災についてもっと伝えたい。』という思いが強くなり、防災士になりました。防災士としては、訓練や研修会、講座を通じて知識、技術、経験を伝え、地域の防災力を高める活動をしています。

災害は家族がそろっている時に起きるとは限りません。だからこそ、いざというときに備え、家族で災害時の対応や連絡方法を話し合っておきたいです。家族の無事が分かれば、人を助ける行動にもつながります。地域の自主防災組織の訓練などにも、年に一度でもいいので参加してほしいですね。参加することで、防災意識が高まり地域のつながりが強くなります。防災士は地域防災の中心的な役割を担うと思います。深谷市で、災害により悲しい涙を流す人がいなくなるよう、これからも活動を続けます。



▲自主防災組織や防災士を対象とした研修会で講演

新たに92人の防災士が活躍します！

市では、地域の防災活動で活躍する防災士を増やすため、自己負担なく市内の会場で防災士の資格が取得可能となる『深谷市防災士養成講座』を開催し、92人のかたが防災士の資格を取得しました。今後、地域の防災リーダーとして、市内の自主防災組織などで活動します。

NEW /



田谷自主防災会 防災士
 さいとうかずすけ
 齊藤和也さん(深谷市役所職員)

防災士として、日ごろから顔の見える関係を築き、地域での災害に備える体制づくりのお手伝いできればと思っています。



助けられる人から助ける人へ
地域の防災力

いつ起こるか分からない大地震

平成23年3月11日に発生した東日本大震災から15年。その間にも、平成28年熊本地震や記憶に新しい令和6年能登半島地震など、大きな地震が発生しています。大災害から、私たちは防災に對する多くの教訓を得ました。しかし、時間の経過と共に、そのことを忘れていっていませんか。

『深谷では大きな地震は起こりませんが、過去の振り返ると、深谷市でも大地震による被害が発生しています(左ページ『振り返る深谷の地震被害』参照)。大地震はいつ襲ってくるか分かりません。』

共に助け合う『共助』の重要性

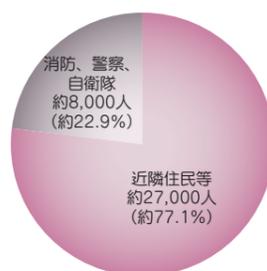
その時に必要なことは何か。どう行動すればよいか。大災害が発生したときに重要なことは、自分で自分の命を守る『自助』、地域で共に助け合う『共助』、国や自治体などの公的機関による援助や

救助の『公助』です。

しかし、災害の規模が大きくなると、被害の範囲が大きくなり、行政による公助が行き届くまでには、どうしても時間がかかります。多くの命を救うためには、公助を待つ間、まずは自分で自分の命を守り、その上での共助が欠かせません。地域住民が一丸となって協力し合い、被害を拡大させないことが大切です。

今回の特集では、地域の防災力向上のために活動する皆さんを紹介いたします。

阪神・淡路大震災における救助の主体と救出者数



阪神・淡路大震災では、約77%の人が、家族や近所の住民などによって、倒壊した建物などから救出され、生き延びることができました。

(出典:令和6年版防災白書)

振り返る 深谷の地震被害

大正12年 関東大震災

旧深谷市では、家屋が東西に1メートルくらい揺れ動き、通りに地割れができるほどでした。日本煉瓦製造株式会社社の煙突などは、大音響とともに崩壊しました。

昭和6年 西埼玉地震

道路に亀裂が生じ、石塔やれんが塀が倒れ、家屋の倒壊・半壊や橋りょうが破損しました。旧富国館製糸工場の煙突の残欠が倒壊し、その下で遊んでいた子ども数人が死傷しました。深谷小学校の校庭には被災者が避難しました。旧深谷町の被害は死者5人、重軽傷者約30人、全壊家屋25戸、半壊家屋24戸、煙突倒壊16本でした。また、旧川本町は重傷者2人、煙突倒壊1本、旧花園町は花園小学校教室の壁の大半が崩れ落ちたといわれています。



(出典:西埼玉強震報告)

平成23年 東日本大震災

深谷市の震度は5強で、被害は、骨折1人、民家被害35件でした。福島第一原子力発電所の事故により、ホットスポットと呼ばれる局所的に放射能の高い地域が発生しました。

助けられる人から助ける人へ
特集 地域の防災力

自主防災組織

自主防災組織は自治会を母体とした団体で、初期消火、応急救護、救出救護などを協力して行います。現在、深谷市では168の自主防災会が結成されていて、地域で活動しています。

本郷自主防災会では、11月に防災訓練を行い、消火器の使い方やAED（自動体外式除細動器）の使い方を訓練しました。意外と消火器を使ったことがない人が多いことなど、訓練してみて課題が見えました。訓練は必ず役に立つので、年1回以上、継続して行う必要があると思います。

大災害が起きたとき、避難所の運営は共助と公助で成り立ちます。避難生活は長期化することもあるので、自主防災組織が中心となり、避難者の生活を守り支えることが重要です。市内全ての198自治会で自主防災組織が結成され、毎年訓練するようになると、災害に対する危機管理意識が高まると



▲本郷地区の防災訓練で、消防団のかたからAEDの使い方を学ぶ

思います。訓練を重ねることが、命を守る力につながります。

Interview

本郷自主防災会
 いいのこういち
 会長 飯野浩一さん



自主防災組織結成の相談は総務防災課（☎574-6635）へご連絡ください。

消防団

消防団は、災害の発生時に仕事中でも現場に駆け付け、消火活動や救助・救出活動などを行っています。市内には25の分団と女性分団の計26分団があり、現在、370人の団員が地域のために活動しています。

『地元之恩返しをしたい。』と思い消防団に入団し、分団長になって10年になります。普段は火災の連絡が入ればすぐ団員に指示を出し、必要に応じて出動しています。また、夜警（夜間巡回）や水防活動、明戸中学校の防災訓練など、地域のために活動する場面は多いです。

住民の皆さんには、災害時に『誰かがやるだろう。』ではなく、自分から一歩踏み出してほしいと思っています。また、災害への備えには、日ごろから近所の人にあいさつするなど、住民同士のコミュニケーションが大切で、いざという時に必ず役に立ちますし、地域の情報や協力が一番頼りになります。地域に『住んでいる』のではなく、『住まわせてもらっている』という気持ちを大事に、これからも活動していきます。



▲明戸地区の支会合同訓練で、明戸中学校の生徒と放水訓練

Interview

深谷市消防団第7分団
 はしもとかずや
 分団長 橋本和也さん



深谷市消防団員を随時募集しています。お気軽に消防総務課（☎571-0900）へご連絡ください。

赤十字奉仕団

『ボランティア活動を通じて地域社会に貢献したい。』という思いを持った人たちによるボランティアグループで、地域社会の福祉向上や災害支援のために活動しています。

深谷市赤十字奉仕団の主な活動は、炊き出しや献血啓発、スポーツ大会での救助補助、さらに年1回の実技研修と講習などです。

現在、活動している362人の団員は、近年ますます自主性が高まり、各地区の防災訓練でも頼もしい存在です。災害が起きたとき、団員はまず避難所に行き、炊き出しなどを担います。各地区で行っている防災訓練にも参加しているので、実践に近い形で訓練ができています。また、友好都市の新潟県南魚沼市の防災訓練に参加し、小学生への炊き出し指導を行うなど、次世代への防災教育にも力を注いでいます。

一人ひとりの防災意識が高まれば、いろいろな場所で人を助けることができ、災害で命を落とす人が減ると思います。



▲『ふかや災害備えフェス』での炊き出し

活動に興味があるかたは、市社会福祉協議会（☎573-6563）へご連絡ください。

未来を担うこどもたちも学んでいます！

1月31日にワモア川本で開催した『こころざし未来塾』で、市内小学校4年生～6年生の児童が防災について学びました。児童たちは、いつ起こるか分からない自然災害に直面したとき、自分や周囲の人たちを守るための知識と行動力を身に付けました。



▲避難所での生活の様子を熱心に聞く児童たち



▲実際に避難所で使うダンボールベッドを組み立てる児童たち

備えは日々の意識から

地域の防災力は、特別な誰かだけが支えているものではありません。家の中を見直す、家族と話をし、地域の活動に目を向けてみるなど、一人ひとりの日々の暮らしの中にある、小さな意識や備えが積み重なって、大きな力となります。市では、災害発生時の被害の想定をお知らせし、備えてもらうための情報をまとめた冊子『深谷市ハザードマップ』を発行しています。自分や家族の命が守れるよう、改めてハザードマップを確認し、確かな備えにつなげましょう。

深谷市ハザードマップ

Web版深谷市ハザードマップ